

カルチヤー寄稿

◆人はなぜロシア語を学ぶか

私事で恐縮であるが、私は東京外国語大学というところでロシア語を専攻した。1980年代、超大国ソ連がまだ健在だった頃の話である。

当時、学生がロシア語を学びたいと思う動機には、主に2つのパターンがあった。第1に、社会主義・共産主義への傾倒である。第2に、ロシア文化への関心である。

まず第1の点について言えば、ロシアは1917年に人類史上初めて社会主義革命を成功させた国であり、その結果成立したのがソビエト連邦だった。革命の理想に燃える若者が、「社会主義の祖国」の言語を習得しようとしたのも、うなずける。ただし、われわれの学生時代になると、ごく少数派になっていたが、第2のロシア文化への関心については、多くの説明は要さないであろう。ドストエフスキーやトルストイなどの作品に魅せられてロシア語の勉強を志すというパターン

がある。私自身は、かなりの珍

種であった。1983年9月に起きたソ連による大韓航空機撃墜事件に衝撃を受け、国際関係論の研究を志し、その手段としてロシア語を選んだのだ。

憧れではなく、いわば「敵を知る」ことが目的だったことになる。ただ、「好きこそものの上手なれ」

「敵を知る」ことが目的だったことになる。ただ、「好きこそものの上手なれ」

上達しないということ、入学後に思い知らされることになる。

愛情を言つと、大学時代のわがクラスに一番多かったのは、特別な動機もなしにロシア語学科に入ってくる連中であつた。私は「共通一次世代」に属す。共通一次試験で何点くらいだったか、この学科くらいが合格しやすいという相場があるのだ。当時、ロシア語学科卒業生にはそれなりの就職口もあつたので、

多めの受験生が深い考えもなく、ロシア語を選んだのである。

は改革開放が始まっていたが、まだまだ中国は貧しいだけの国で、今のようには中国語人材が引く手あまたという雰囲気はなかった。われわれも、どちらかと言えば、中国語学科を見下ろしていたような気がする。

かつて日本では、「ソ連は嫌いだけれどロシアは好き」と言う人が少な

なかつたように思う。教条的なイデオロギーを振りかざし、軍備を増強するソ連という国は嫌

だけれど、スケールの大きな国土や自然、偉大な文化を生み出した国民には魅力を感じる、というわけである。

そんな日本国民が、ソ連を好きになったことが一度だけあつた。ゴルバチョフ時代だ。閉塞的な体制を刷新しようと奮闘する若き最高指導者に、

日本国民は喝采を送った。私が現在所属する団体に入社した1989年は、日本でのソ連ブームが最高潮に達した年だった。

自由化が、必ずしも北方領土問題での柔軟化につながるならなかったことである。いつしか、日本国民のロシアに対する関心自体が大きく低下していった。他方、1990年代に入ると、中国の高度成長が本格化し、日本企業も雪崩を打って中国市場になびいていく。

とどろが、その後、両者の明暗は、われわれが早合点したのは逆の形で分かれていく。ゴルバ

チョフ改革は頓挫（とんざ）し、1991年暮れ

落とし六

このように、BRICSブームはわれわれロシア業界人にとっては追い風なのだが、弊害もある。ロシアのことをよくご存じない一般の方が、誤って中国のイメージをロシアにだぶらせてしまうことが多いのだ。

ロシアでは、社会主義時代に構築された資本ストックの老朽化が問題となっており、他方で人口が減少するなど、および「新興市場」には似つかわしくない現実がある。

移りゆくロシアのイメージ

社団法人ロシアN I S貿易会・
ロシアN I S経済研究所 調査役 服部 倫卓

成長をリードする潜在的な大国として位置付けるレポートを発表し、4カ国を総称するBRICSという造語を考案したが、ブームの発端だった。私が勤務するロシアN I S貿易会（この9月にロシア東欧貿易会から改名）でも、ロシアに関する問い合わせをいただく機会が、かなり増えてきた。

このように、BRICSブームはわれわれロシア業界人にとっては追い風なのだが、弊害もある。ロシアのことをよくご存じない一般の方が、誤って中国のイメージをロシアにだぶらせてしまうことが多いのだ。

ロシアでは、社会主義時代に構築された資本ストックの老朽化が問題となっており、他方で人口が減少するなど、および「新興市場」には似つかわしくない現実がある。

ロシアが有望市場であることは間違いないにせよ、実情を踏まえて現実的なアプローチをとらな